

6月1日は、衣更えでした。学校や会社では一斉に夏支度です。学生の上着を脱いだ姿に清々しさを感じると共に、夏の暑さがもうそこまで来ていることを実感せずにはいられません。

辞書によると、衣更えの歴史は、平安時代までさかのぼることができ、その時代の公家<sup>くげ</sup>は、年に七回も着るものを替えていたようです。また、江戸時代には、四月一日と十月一日が衣更えの日となっていました。

道元禅師の詠<sup>よ</sup>まれた和歌のひとつ、傘松<sup>さんしょうどうえい</sup>道詠<sup>いっく</sup>に収められている一句を紹介いたします。

草<sup>くさ</sup>の庵<sup>いお</sup> 夏のはじめの衣がえ 涼<sup>すずし</sup>きすだれの かかるばかりぞ

夏の初めの衣更えの時期、すだれをかけたことが詠まれています。

道元禅師は、日々続けられる修行の中、衣更えのこの時期、衣更えに心を馳せることで、心新たに修行を続けられたのではないのでしょうか。そんな思いをこの和歌に詠みこんだのでしょうか。

永平寺や總持寺などの修行道場では、6月1日と10月1日に、僧堂<sup>れん</sup>という修行生活の中心となる建物の前後の入口の簾を、風通しの良いすだれと、風を通さない厚い布製のものとに、架け替えます。

日々僧堂で過ごしている修行僧にとっては、時の移り変わりを感じると共に、日々続けられる修行に対し心新たにするひと時でもあるのです。

平安時代から時を経て、科学の進んだ現代でもずっと衣更えが社会の中で行われています。それは、きっと四季という自然の中で共に生きてきた私たち日本人の「智慧<sup>ちえ</sup>」なのではないのでしょうか。社会全体で衣更えをすることによって、夏の暑さ、冬の寒さを前に、心を新たにする。心構えにも似た行いなのでしょう。

草<sup>くさ</sup>の庵<sup>いお</sup> 夏のはじめの衣がえ 涼<sup>すずし</sup>きすだれの かかるばかりぞ

毎年おとずれる衣更えのこの時期、日々の暮らしを見つめ直してみたいかがでしょうか。